

住環境財団 研究報告書 2021 年度助成（2022 年度に終了）

研究課題名：「メムにおける Research Retreat 研究」

研究メンバー一覧

名前	職名	所属
森下 有	特任講師	東京大学生産技術研究所 人文・社会系部門

1. 研究の背景

多様な地域それぞれが持つ固有の価値を資源として捉えることが、今後の社会に強く求められている。このためには、ある固有の地域に、汎用解ではない景色を見ようとする「研究者」が集まり、その土地固有の資源を再読し、理解し、生まれてくる多様な情報をさらに資源化し、共有可能な形にしていく活動が求められている。しかしながら、実際の学術界においては、多様な研究課題を持って地域に研究者がそれぞれ来訪し、それぞれの目的を達成していくことはあっても、統合的な観点からその地域固有の資源に関して言及することは少ない。このためには、多様な専門言語を持って長い時間軸上に散在する知識をまとめる母体の存在が必要であると考えられる。

2. 研究目的と方法

本研究では、北海道大樹町芽武にて展開する Memu Earth Lab にて、建築という統合的な仕組みづくりの観点から、「Research Retreat：リサーチ・リトリート」という独自の知識が場所に滞在する仕組み、研究者滞在プログラムをプロトタイプし、その形式を題材に、地域における研究者の知見の役割と、持続可能な地域との関係性の構築に向けた情報マネジメントのありようについて検証する。

3. 予算

項目	内訳	数量	金額 (千円)	備考
人件費	研究担当者	1	5,500	外部委託の形式をとる
旅費	国内旅費	4	300	
物件費	消耗品等	1	500	
その他			500	
東京大学基金			1,200	※受入金額の 15%
合計			8,000	

4. 期間

2021年6月～ 2023年3月

5. 研究施行上の問題点

コロナ禍において、実験対象となる多様な人材を呼び込み、さらに地域の方々との接点を作るということが困難となり、小規模で控えめに進めることとなり、研究期間の延長を余儀なくされた。この課題は、2022年9月ごろの緩和により解決された。

6. 施行計画と実施内容（変更後）

研究期間中に8組の主体にリサーチ・リトリートへの参加を依頼し、研究滞在と地域での再読フィールドワークを実施した。その中から個別の研究内容とは別に、滞在者が如何に場所とつながりをもったか、どのような方法で滞在することがそれぞれが持ち込む知見を、現地の可能性の束とつなぐことができるかを検証し、リサーチ・リトリートの役割自体を検証した。従って個別の研究報告は本報告では割愛するが、既に報告が公開できるものに関しては、参考のため以下にリンクを記載した。

2021/6	運営体制の検証と人材の検証
2021/7	北條知子氏滞在（サウンド・アーティスト）
2021/7	鳥海智史氏・幸子氏滞在（シェフ/ソムリエ）
2021/10	浅井裕介氏滞在（画家）
2022/3	Noah 氏滞在（音楽家）
2022/3	柳沢英輔氏滞在（京都大学・文化人類学者）
2022/9	Jakob Zeller 氏、Ethel Hoon 氏滞在（シェフ/オーストリア）
2022/10	Rahel Craft 氏滞在（サウンドアーティスト/スイス）
2023/1	Jürgen Schmücking 氏、Johannes Jakobi 氏、Lukas Nagl 氏滞在 （ジャーナリスト、アーティスト、シェフ/オーストリア）
2023/3	方法論として総括

滞在記録の参考：

北條知子氏滞在記録

<https://memuearthlab.jp/2021/07/26/cultivating-memu/>

Jakob Zeller 氏、 Ethel Hoon 氏滞在記録

https://scrapbox.io/memuearthlab/realizing_memu:_research_retreat

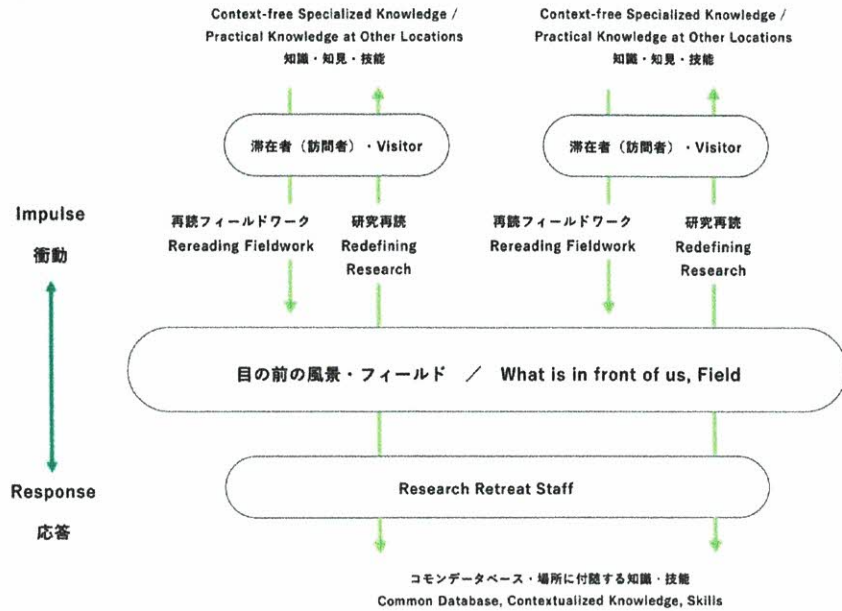
7. 研究成果

対象とする地域に外から人が知見を持ち込むことで偶発的可能性というもの生まれる。その可能性は大いに意義深いものであるが、さらに知識や知見の流入を持続的に継続し、多角的な観点から地域に必要とされる情報を見極め、それを醸造し、実際にその地域の中でプロトタイピングしていくプロセスには、偶然を繰り返すアーキテクチャ（仕組み）づくり、あるいは情報のマネジメントが重要であることが把握された。このような偶発的きっかけは人に依存する部分が多いも、そのような人たちが持続的に関与するためのアーキテクチャとはどのようなものなのか検証した。

リサーチ・リトリートの特徴

「リサーチ・リトリート」がリトリートたる所以は、研究に携わる人材が、そもそも何を研究すべきかを改めて考える時間が存在する場所をつくる、という概念に発端する。すなわち、Retreat/リトリート、一步引く、という時間を持つことで、研究の大枠の再考、研究がどのように実社会と接続しているのか、都市的人工物のコンテキストではなく、近自然のコンテキストで研究の意味合いを検証すると言ったことが可能となる。十勝平野南部に位置するメムは、日本でも類を見ない広大な開けた土地、人口密度の低さ、自然環境との近接、静けさが存在し、現社会における都市的空間思考からのリトリートという可能性を助長する。そしてメムという場所に滞在するにあたり、既にアウトプットが想定された目的を持ち込むのではなく、あえて目的設定を保留し、自身の普段の思考（アート思考、デザイン思考、ビジネス思考等、昨今では多様な思考が存在する）を再読するという意味合いの再読フィールドワークを行うことで、この場所が示唆する、リトリートした上での思考により再度目的を考え直す機会を得ることが、リサーチ・リトリートのなす役割であるとした。従って、研究というコンテキストにおいて、リモートワークでも、リサーチ・ホテルでも、リサーチ・レジデンスでもセミナーハウスでもない社会的機能について言及する。

滞在を通じた成果物から検証するリサーチ・リトリートの考え方



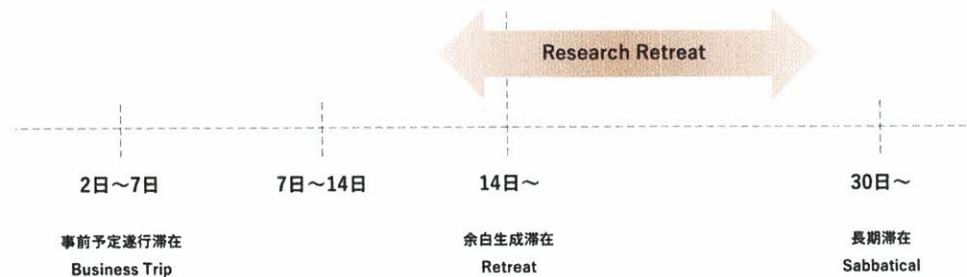
特定の場所に滞在し、創作活動を実施する滞在形式に、特に芸術系の人材を対象としたアーティスト・レジデンスという形式が存在する。このようなレジデンスでは、あらかじめ決定された目的を定める成果主義的なアプローチが国内では多く見受けられる。それは活動の説明責任ということで分かりやすい「成果物」が求められるのであろうが、このリサーチ・リトリートという形式においては、成果は、「この場所の新たな見方」であったり、「目の前に既に存在していたものの、再読された意味や価値」として設定するに至った。すなわち、考え方やものの見方、アプローチの方法の変化などが、成果として重要であるということは、それらは、ものとして美術館や博物館的に保存・アーカイブされるものではなく、より技能的・能力的である。すなわち、そのような成果を継続的に実践し、蓄積し更新していく役割を担う人材と仕組みが必要とされるということでもある。後に人材、必要とされる能力について詳しく言及する。

リサーチ・リトリートの滞在期間の検証

これまでの呼び方と異なる「リサーチ・リトリート」がどの期間の場所とのエンゲージメントを指すのかを検証した。これまでも大学教員に対しては出張申請を行う「出張」という場の移動の方法と、日本ではまだ文化的に浸透していないが「サバティカル」として中長期1ヶ月以上の期間、普段の研究のサイクルから離れる機会づくりの方法がある。海外のアーティスト・レジデンスの事例ではこのサバティカル期間の研究者滞在場所として機能している場所も多く、各々の活動の枠を開拓する機会となっている。期間という概念にしばらく

れ、活動の可能性にネガティブな影響を与えてしまっても元も子もないが、場所がもつ可能性の束と訪問者が接続しうるための時間を理解することで、場所固有の時間軸を設定できると理解している。それは、その場所における時間の流れかたや、活動を行う上での余裕や余白につながる。

今回の期間中訪問対象としたのは、職種としてはアーティストやシェフと言われる芸術や食に携わる主体が中心であった。その多くが大学などの高等教育機関に所属しない方々で、実際に2~3週間の滞在を介した活動を行う社会的自由を持っているという背景もあった。一方多くの高等教育機関に所属する研究者は長くて4日、少なくとも2日滞在するのが限度であるという反応が多く、地域との関わりを持つ、あるいは情報を生成するというよりも、インタビューなどの情報交換的な役割に留まる。



地域の固有性とその場で派生する機会をつむぐ作業であることを考えると、2~3日というのは事前に決められたアイテナリー内での業務遂行型になり、その場で派生する有機的なつながりを有効化するのには難しいのが実際であることも把握された。これは訪問者のホームページと訪問先の距離的な問題も絡むので一般論化が難しいが、ここメモにおいては東京からだと移動に半日、すなわち往復で1日要すると考えると1泊2日の活動時間は到着日の午後と出発日の午前のみとなる。また十勝平野内では研究対象となるフィールド間の距離が比較的あり、どの訪問先も往復で1時間、滞在1時間と2時間以上となり、1日で無理なく安全に活動できるのは2~3ヶ所と限定的になることも留意する必要がある。

リサーチ・リトリートの適性期間は滞在者によるのは前提ではあるが、1週間だとやはりアイテナリー遂行的になり、2週間にて地域内ネットワークとの有機的な機会創出が発生するケースが出来るが多かった。2週間という時間を確保することで、スケジュールに余白が生まれ、地域の主体が気がついた新しいネットワーキングに応答することが可能となる。当たり前ではあるが、訪問側の予定で埋め尽くすのではなく、地域側が作り出す予定のための余白を事前に考慮することも必要であり、これは事前に計画する休憩時間とは別の余白として準備が必要である。

以上の見解より、十勝平野におけるフィールドワークを主体とした研究者滞在の適性期間として、2~3週間以上を想定する。今後、1ヶ月以上の滞在がネガティブな要素を生み出すか否かを慎重に検討していく。

リサーチ・リトリート運営に必要となる能力に関する検証

リサーチ・リトリートは、場所に滞在するという宿泊施設の機能のみでは不十分であり、またそのことがかなり重要なポイントとなることが把握された。リサーチ・リトリートにおいて必要とされるのは、価値がまだ明確化していない地域の可能性の束を、滞在者の研究という観点に結びつける機能である。

一般的に、訪問者によって持ち寄られた研究テーマと地域とのコーディネーションという地域研究補佐業務は存在するが、「明らかな目的」をあえて求めないリサーチ・リトリートにおいては、研究的視点がもたらす再読の可能性をリトリート側が読み取り、研究者から引き出す工程が必要とされる。すなわち、研究者の持つ視点をもってすると見えてくる普段とは異なる目の前の景色の可能性に言及するのは、リサーチ・リトリート側である。

現地の資源とのリレーションを構築するという観点では、宿泊施設の機能においても、その既存の価値を提供するというにとどまらず、滞在を通して地域の価値を探求することに思考が向くよう、サービスという行動が整えられる必要がある。すなわち、研究という思考と滞在時の生活的思考が断絶しない工夫が必要とされる。

いわゆる目的を遂行するための「出張」に対するビジネスホテルというモデルは宿泊そのものが目的とされ、多くの場合、提供される食を介して僅かに地域性がサービスされる。「休暇」などを対象としたリゾートホテルというモデルでは地域の価値をサービス化して提供することを通し、地域の理解が深まるということのマネタイズの一部としている。そのようなサービスを介した、ある程度明確化している地域の価値は、他の宿泊施設の機能でも提供されている。リサーチ・リトリートのモデルにおいては、他のモデルのような線引き（近代的な仕事／余暇という線引き）を行わないようなアーキテクチャ・仕組みづくりが必要と考えられる。そのような意味合いで、いわゆるホテル業におけるサービス機能とは異なる機能が必要であると考えられる。

以下に本研究期間を介して顕になった運営のために必要と考えられる機能についてリストアップする。これらは、機能と人材が対で存在するということはおそらく難しく、実際の機能遂行においては、多機能人材やお互いに補完しながら遂行ということが現実的である。また全てが人による遂行ではなく、デジタルツールを用いた情報資源の循環により補完

されることが前提である。また、敢えて二つの方向性を備えてリスト化したのが、相互の互換性のある項目も存在することに留意が必要である。

場所を研究につなぐ機能

- Facility Management (FM) : 物理的な施設の運営
 - 中長期施設計画および保全、日々の施設運用管理、エネルギー、資源循環（廃棄物を含む）、植栽
 - 上記の項目を管理業務として行う傍ら、研究として理解する
 - 資源循環や植栽は特に分かりやすく、植生や生態系研究、資源研究と直結する
- 宿泊に関わるサービスの運営機能
 - 一般的な宿泊機能（何を一般と捉えるかも重要な論点となる）
 - それを如何に地域資源循環でなりたたせるか、また地域の理解への機会創出とすることを検討する機能
 - 共食の機会づくりと施設における食の品質と社会的責任の担保

研究を場所につなぐ機能

- ファシリテーション・オーガニゼーション・地域コーディネーター
- リレーション・デザイン
 - 研究者の知見・情報と場所の関係性をデザインする
- データマネジメント（場所から生まれる情報と、場所に持ち込まれる情報の相互関係をつくる）
 - リレーション・デザインの結果生まれる情報を、各滞在者を超えて共有資源として利用可能な形態に整備する機能

リサーチ・リトリートの今後

以上の滞在プログラム、およびのアーキテクチャ（仕組み）のプロトタイプを通し、研究者と場所の関わり方について考察を行った。研究という社会的機能をより固有の場所に対して作用させるためには、これまでの滞在型施設とは異なるアーキテクチャ（仕組み）が必要であること、またそのような施設が有する機能においても、これまでとは異なる機能が要求され、そのための人材のありようについて今後言及していく必要性が把握された。今回の研究の範囲では、研究者の滞在期間設定とその時間が可能にする知識循環について、また、滞在中を通じた成果物の考え方、持続的運営のために必要な機能に関して一般論化を試みた。今

後、リサーチ・リトリートを運営するための施設側の要件に関して検証を行うことで、このようなアーキテクチャ（仕組み）と物理的施設の関係性を模索していく。